日本医学教育学会第35回大会：佐賀医科大学（2003年）[*1]

小泉　俊三[*2]

第35回日本医学教育学会総会および大会は，佐賀医科大学（当時）学長杉森甫大会長の主宰により，「医学教育と地域貢献」を基調テーマとして，2003年7月25，26日の両日，佐賀県医師会メディカルセンターで開催された．2日間の大会参加登録者数は478名（内学生37名），大会参加者総数は674名で，これまでで最大規模の大会の1つとなった．

地域連携を重視し，実行委員会には佐賀県医師会をはじめ，地域医療機関等の代表者に広く参加を呼び掛けた．一方，公開関連行事として，大会前日に酒見隆信，十日市健助両教授（現佐賀大学医学部地域医療科学教育研究センター）の司会で，Hafler（ハーバード大），Greene（ハワイ大）両先生による記念教育講演会を佐賀医科大学臨床大講堂で開催した．

大会長講演「医学教育におけるパラダイムの転換―佐賀医科大学における教育を中心に―」では医学教育改革に取り組む佐賀医科大学の現況を紹介し，会場で，佐賀医科大学におけるPBLテュートリアル導入の軌跡を紹介したパンフレットを配布した．

特別講演にはOSCE創始者Harden教授を招待し，「The Objective Structured Clinical Examination (OSCE)－Past, Present and Future」と題してお話しいただいた．欧州全体の医学教育界のリーダーでもあるHarden教授はシンポジウムでも特別発言でThe International Virtual Medical School（IVIMEDS）を紹介された．

教育講演には米国医学教育学界の第一人者でイリノイ大医学教育学部門のGeorges Bordage教授に「Learning from and sharing our diagnostic errors-Disclosure without blame」と題した講演をお願いした．確固とした教育学理論に基づき，現場の診断学教育にすぐに役立つ優れた講義であり，聴衆から絶賛を受けた．ちなみにBordage教授は2004年から東京大学医学教育国際協力研究センター客員教授として数か月間日本滞在予定であった．

「シンポジウム1：地域におけるプライマリ・ケア実習について」では，地域基盤型医学生実習の現状と発展への方法が討論されたが，周到な事前準備と的を射た討論で非常に充実したセッションであった．「シンポジウム2：卒後臨床研修必修化を目前にして―期待と要望」では厚生省医政局医事課の吹野恵子氏や研修医など，シンポジストが若手中心で，医学教育界の世代交代を実感させた．「シンポジウム3：統合カリキュラムでの基礎系実習のあり方」では，英国の解剖教育の紹介，基礎系実習のIT化についての発表があった．特に「シンポジウム4：PBLテュートリアル教育の新たな展開」では，PBLの世界的リーダーが3名も壇上に上がり，予定の1時間半は文字通り短く感じられた．

一般・要望演題では，卒後臨床研修と共用試験（OSCEとCBT）に関するものが多かった．韓国のGachon医科大学長で本学会の名誉会員でもあるKim Yong-Il先生は，韓国でいくつかの医科大学がメディカルスクール制度を取り入れようとしていることを特別発言で紹介された．

ワークショップでは，1. ステーションの設定と評価者の役割，2. 模擬患者とコミュニケーションスキル教育，3. 卒前/卒後のEBM教育における工夫，4. 臨床問題解決能力の教育：PBLカリキュラムのあり方，の4企画のうちOSCE関連セッションが好評であった．

今回，日本医学教育学会として初めて選挙によ

---

*1 The 35th Congress of Japan Society for Medical Education (2003), Saga Medical School
キーワード：日本医学教育学会，佐賀医科大学，地域貢献

*2 Shunzo Koizumi　佐賀大学医学部附属病院

り評議員が選出され，大会前日，120人の選挙評議員と30人の推薦評議員による役員選挙が佐賀医科大学で実施された．総会では新任の齋藤宣彦会長が紹介され，決算・予算が承認された後，医学教育賞が授与された．

学会運営に関しては常置委員会等開催のための部屋が不足してご迷惑をおかけした．オンライン登録はおおむね定着し，予稿集は今回から雑誌『医学教育』補冊となり，従来の大会記録号がなくなった．一般・要望演題に関しては従来の口演に加え，ポスター形式を取り入れた．

日本列島の西端に近い佐賀という不便な土地にもかかわらず，過去最高の演題登録をいただき，非常に盛会であっただけでなく，始めて執行部が評議員による選挙で選ばれるなど，日本の医学教育の歴史にとって記念すべき大会となった．最後に大会運営の要として活躍した江村正事務局長に改めて深甚の謝意を表したい．